慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『海潮音』の成立背景
Sub Title	The background to the publication of Kaicho-on
Author	小沢, 次郎(Ozawa, Jiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.52, (1988. 1) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩崎英二郎教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『海潮音』の成立背景

小沢次郎

I　趣旨

わが邦に初めて泰西の本格的な象徴詩を紹介した翻訳詩集『海潮音』は、明治三八年(一九〇五年)一〇月に東京の本郷書院から刊行された。当時、翻訳者の上田敏は三二歳という新進気鋭の英文学者であり、小泉八雲(Lafcadio Hearn)の後任として、夏目漱石、アーサア・ロイド(Arthur Lloyd)とともに東京帝国大学文科大学英文学講師の職にあり、その文壇における名声は『文芸論集』や『最近海外文学』等の評論集によって知られていた。

しかし、こんにち上田敏が知られているのはそうした評論集の著者としてではなく、『海潮音』の翻訳者としてである。北原白秋は「明治大正詩史概観」(現代日本文学全集第三七編『現代日本詩集　現代日本漢詩集』昭和四年四月、改造社)のなかで、『海潮音』のごとき名訳は「前代にも見ず、大正昭和を通じても絶えて後を継ぐものは現れぬ」とし、上田敏を「近代詩壇の母」とまで評価している。

ところが『海潮音』が近代日本文学史上このような重要な位置を占めるにも拘らず、その基礎的な文献調査はまだ充分になされたとはいえない状況にある。

本稿では『海潮音』の研究を始めるにあたり、必要な基礎的文献資料の紹介にとどめて、その調査結果を報告することにしたい。

報告は以下の手順で行なう。(一)上田敏と本郷書院の関係はどのようなものか。(二)翻訳詩の発表時期と発表誌を検討し、『海潮音』の編纂が、いつ、どのような過程でなされたか。(三)上田敏が翻訳するに際し依拠した原典は何か。(四)その原典が『海潮音』の翻訳詩の配列にどのような影響を与えたか、の四点である。

II　上田敏と本郷書院

手順(一)とした上田敏と本郷書院の関係を検討する。

それには上田敏が生前、著訳書を刊行した出版書肆をみる必要がある。(次頁、表A参照)

表Aから二つの疑問が生じる。第一に『海潮音』刊行以前で上田敏と最も親しい関係にあった出版書肆は文友館であったにも拘らず、なぜ『海潮音』は文友館から刊行されなかったか。第二に上田敏の生前・没後を通じ、本郷書院は上田敏の著訳書を『海潮音』以外には刊行せず、しかも上田敏と本郷書院はそれほど親しい関係にあったとは考えられないにも拘らず、なぜ『海潮音』だけが本郷書院から刊行されたか、である。

第一の疑問を明らかにするためには、上田敏と文友館の関係をみなければならない。

表Aから『海潮音』の刊行以前、上田敏と出版書肆の関係は総じて一著訳書に対しそれぞれ相異なる出版書肆一社の

表A　上田敏の著書

刊行年月	著書書名	出版書肆
明治三二年　三月	『耶蘇』（世界歴史譚第三編）	博文館
〃　四月	『新体中学国文教程』（大町桂月と共編　全一〇巻）	大日本図書株式会社
〃　七月	*THE VICTORIAN LYRE*	丸善株式会社
明治三四年一二月	『最近海外文学』	文友館
〃　〃	『みをつくし』（翻訳美文集）	文友館
〃　〃	『文芸論集』	春陽堂
〃　〃	『詩聖ダンテ』	金港堂
明治三五年　三月	『最近海外文学続編』	文友館
明治三六年	『正訳英和新辞典』（上田万年と共編）	富山房
明治三七年	*Specimens of English Prose.* 3 vols.	大倉書店
明治三八年一〇月	『海潮音』（翻訳詩集）	本郷書院
明治四〇年　三月	『文芸講話』	金尾文淵堂
明治四二年　六月	『心』（アンドレイエフ原作）	春陽堂
明治四三年　六月	『小説　渦巻』	大倉書店
大正　二年　六月	『思想問題』	近代文芸社
大正　三年　六月	『現代英文学』（現代評論叢書第一編）	簡易生活社
〃　七月	『独語と対話』	弘学館書店
大正　四年一〇月	『小唄』	阿蘭陀書房
大正　五年一〇月	*Ueda's Standard English Readers.* 5 vols.	明治書院

割合で割り当てられるが、例外として文友館にだけは三著訳書が割り当てられる。この事実から文友館は上田敏と特別な関係にあった出版書肆と推定される。しかも文友館から『海潮音』の姉妹編である翻訳美文集『みをつくし』も刊行されていることからみれば、『海潮音』も同じ文友館から刊行されるのが自然であるが、実際にはそうなっていない。

この理由を知るためには、文友館とは如何なる出版書肆であったかを明確にしなければならない。（表B参照）

表Bから文友館が最初に上田敏の著作を掲載したのは小説集『青燈集』であることがわかる。これにより上田敏が文

表B　文友館の刊行物

刊行年月	刊行物書名	著者・編者等
明治二三年　五月	『唱歌と軍歌』	伊藤銀(編)
明治三四年　五月	『茶話』（人物評論集）	伊藤銀
〃　八月	『みだれ髪』（東京新詩社と合同発行）	鳳晶子
〃　一〇月	『青燈集』（小説集）	東京新詩社(編)
〃　一二月	『最近海外文学』	上田敏
〃　〃	『みをつくし』（翻訳美文集）	上田敏
明治三五年　二月	『つゆ草』（詩歌集）	太田水穂
〃　〃	「芸苑」創刊（創刊号のみで廃刊）	上田敏(主幹)
〃　三月	『最近海外文学続編』	上田敏
〃　五月	『山菅』（小品集）	星野天知
〃　六月	「芸文」創刊（同年八月二巻で廃刊）	森鷗外(主幹)
明治三七年　九月	『瑠璃草』（歌文集）	久保より江(編)

友館と繋がりをもつに至った契機は、『青燈集』を編纂した東京新詩社つまり社幹の与謝野鉄幹を仲介としてであったと推定される。以来、明治三四年から翌年にかけて、上田敏は文友館発行の出版物に深くかかわってゆくことになるのは表Bをみてのとおりである。

ここで注目されるのは、上田敏が雑誌「芸苑」および雑誌「芸文」の発刊に中心人物として参画している事実である。これは上田敏が文友館と提携し、自己の文学活動の拠点の確立を企図したことを示唆するものではないだろうか。このことを裏づけるように、「芸苑」創刊号の目次をみると、

芸苑(表紙画)……藤島武二、芸苑に題す……上田敏、ミウズ(画)……藤島武二、かたおもひ(小説)……上田敏、テニソン卿とプレラファエライト……平田禿木、聖女セシリ(Rossetti)、シャロット姫(Holman Hunt)、詩聖ダンテ序……上田敏、童女マリア(Rossetti)、童女マリア解説……上田敏、路氏楽話……上田敏、希臘戯曲小史……千葉臨川、夏の芝居(画)……長原止水、『美術講話』を読む……上田敏、『東洋学会会報』……上田敏、『歌舞伎』……上田敏、『長唄楽譜』……上田敏、『アストン氏日本文学史』……井上十吉。

とあり、内容の大半が上田敏により占められている。しかし、こうした意図で創刊された「芸苑」は創刊号のみで廃刊した。そして同年二月に廃刊した雑誌「めざまし草」の同人を中核とし、さらに今まで両誌と直接には関係のなかった雑誌「帝国文学」の登張竹風、畔柳芥舟を参加させて再編成され、同年六月にあらたに「芸文」として主幹に森鷗外を迎え創刊されることになる。

この「芸文」の創刊を斡旋した中心人物が千葉鉱蔵(臨川・掬香と号す)である。その経緯については「故森林太郎先生追憶の記」(雑誌「三田文学」大正一一年八月)に記される。それによると、もともと「芸文」は、明治三四年小倉師

団に赴任中の森鷗外が偶々上京したとき、千葉鉱蔵との会話で「めざまし草」を刷新し新雑誌を刊行すべきことを述べ、ちょうど翌年の陸軍省勤務にともなう森鷗外の帰京により実現したという成立事情がある。したがって「芸文」は、「めざまし草」を継承発展した雑誌としての性格をつよく持つことになる。千葉鉱蔵から新雑誌創刊の相談をうけた上田敏は、「芸苑」の主張を保持する条件のもとに「芸文」に合流することを快諾し、関係者の賛同を得て「芸文」創刊に至ったと回想している。

しかし、真相は必ずしも千葉鉱蔵の云うように順調に行なわれた訳ではない。明治三五年五月九日付平田禿木宛の上田敏書簡(『定本　上田敏全集』第一〇巻[昭和五六年一〇月、教育出版センター])によれば、「芸文」創刊に漕ぎつけるまでにはいろいろ困難な意見の調整が必要であったことが窺えるのである。そのなかで上田敏は「芸文」創刊についての見通しとして、

昨日掬香氏へ二条申入候。即ち
一、大同団結ならば小生の「芸苑」存置の事
二、千駄木と吾等とならば双方廃刊の事

第二は目下の形成上到底不可能の事ならむも、第一も掬香氏の意見にては不可能なりといふ。

と記し、折衝を平田禿木に委託している。このことは上田敏が飽くまで「芸苑」の存続に固執し、たとえそれが叶わぬ場合でも「めざまし草」と全く同等の立場で新雑誌を創刊することを主張して譲らなかったことを示している。新雑誌発刊に際し当時の「めざまし草」特に主幹である森鷗外の名声や実績を考慮すれば、事実上「芸苑」を「めざまし草」に吸収合併するのが当然な筈である。が、敢えてそれに対し異を唱えたところに、自己の文学活動の拠点確立をめざす

上田敏の決意をみてとることができよう。

結局、上田敏の主張を尊重することで問題は解決し、「芸文」は「芸苑」と「めざまし草」の合流した折衷的な新雑誌として創刊されることになった。これにより上田敏は独占的な雑誌運営ができなくなったかわりに、その代償として森鷗外と親しく提携し一層幅ひろく活動することを可能にしたのである。

ところが、その「芸文」もわずか二巻で廃刊した。単に廃刊しただけでなく、出版書肆の文友館の手を離れ、同人の自費出版というかたちで再出発することになった。それが雑誌「万年艸」の創刊である。文友館からの「芸文」の分離独立の事情については、森鷗外が無署名で「万年艸」創刊号巻頭の題辞に、

芸文の将に巻ノ第三に刊し到らんとするや、発兌書肆事に礙げられて久しく果さず。同人貲を損てゝ発行するに意あり。

と記すが、その「事」の詳しい経緯については不明である。が、「芸文」巻二が発行予定より一と月遅れて刊行されていること、又、「芸文」の廃刊後しばらくの間、文友館から刊行物が認められないことから、「芸文」が発行困難になったのは文友館の経済的な事情に起因し、それにともない出版書肆と「芸文」同人の間に何らかの齟齬が生じたのではないか、と考えられる。

ともあれ「芸文」が文友館から分離独立し「万年艸」が創刊されたとき、それが同時に上田敏と文友館の密月時代の終焉となった。以後、上田敏が文友館と関わるのは、明治三七年九月に発行された歌文集『瑠璃草』（久保より江編）にわずかに序文を寄せるだけにとどまる。

それでは『海潮音』は、なぜ本郷書院から刊行されたのであろうか。

第二の疑問を明らかにするためには、文友館の場合と同様、上田敏と本郷書院の関係をみる必要がある。

だが、そのためには順序として、本郷書院が如何なる出版書肆であったかを明確にしなければならない。（表C参照）

表Cから『海潮音』刊行以前に本郷書院が刊行した書籍の特徴は、雑誌「明星」または東京新詩社に関わりをもった

表C　本郷書院の刊行物（『海潮音』刊行以前のもの）

刊行年月	刊行物書名	著者・編者等
明治三七年　五月	『毒草』（詩歌集）	与謝野　鉄幹・晶　子
〃　一二月	『英独対訳　小倉百人一首』	佐　藤　芝　峰
明治三八年　一月	『恋衣』（詩歌集）	山川登美子・増田　雅子・与謝野晶子
〃　〃	『世界　冒険少年談』	押　川　春　浪
〃　五月	『金帆』（詩集）	尾　上　柴　舟
〃　七月	『春鳥集』（詩集）	蒲　原　有　明
〃　一〇月	『西吟新訳』（翻訳詩集）	小　原　無　絃
〃　〃	『時代笑話　滑稽文学』	越　廼　背　山
不　明	『評釈　日本絶句選』	久　保　天　随
〃　〃	『滑稽笑話』	蜷　川　石　水・渡　辺　清　江
〃　〃	『新編　実用裁縫書　普通部』	高　橋　菊　衛・桜　井　岩　衛
〃　〃	『新編　実用裁縫書　高等部』	高　橋　菊　衛・桜　井　岩　衛
〃　〃	『美文韻文　筆のあと　附作文大要』	佐　藤　芝　峰
明治三八年一〇月	『海潮音』（翻訳詩集）	上　田　敏

詩歌人たちの詩歌書が刊行されていることである。これは当時東京新詩社と本郷書院が、きわめて親密な関係にあったことを示す証拠である。

したがって『海潮音』が上田敏と馴染みのない本郷書院から刊行された要因として、このようにして窺うことのできる東京新詩社との親密な関係に拠るものと推定される。

Ⅲ　翻訳詩の発表時期と発表誌

手順(二)とした『海潮音』における翻訳詩の発表時期および発表誌を検討する。(次頁、表D参照)

表Dから『海潮音』の翻訳詩全五七編のうち、雑誌「明星」に発表されたものは半数以上の三〇編に達していることがわかる。特に明治三八年六月から九月までの期間は、毎月定期的に「明星」に発表されていることは注目されてよい。そして「明星」との関係はそれだけでなく、詩集の書名である『海潮音』が同年七月に発表された翻訳詩編の総題「海潮音」から採られていることによっても、『海潮音』と「明星」との繋がりは並々なものではなく、『海潮音』は明らかに「明星」の文化圏より生まれた翻訳詩集であるといっても過言ではないのである。

当時、上田敏は一流書肆を含む出版書肆から一〇冊に及ぶ著訳書を刊行し、学界および文壇に確乎とした地位を確立していた。

しかしそれにも拘らず、「芸苑」・「芸文」は長続きすることなくすぐに廃刊となり、ついで上田敏のよき理解者であり、『海潮音』を献げられた森鷗外の日露戦争出征にともない「万年艸」も廃刊のやむなきに至った。以後、自己の文学活動の拠点を失った上田敏は雑誌「精華」や雑誌「中央公論」に参加するが、結局は自己の欲するように自由な活動

表D　『海潮音』の翻訳詩の発表時期と発表誌（尚、詩人名は上田敏の表記に拠る）

発表時期	発表誌	翻訳詩	備考
明治三四年一二月	『みをつくし』	ダンヌンチオ　「声曲」	
明治三五年　一月	「中学世界」	フランソア・コペエ　「礼拝」	「楽声」中に散文訳で掲載
〃　一二月	「万年艸」	ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ　「小曲」	散文訳で掲載
〃　〃	〃	〃　「恋の玉座」	
〃　〃	〃	ブラウニング　「春の朝」	
明治三六年　二月	「万年艸」	ブラウニング　「出現」	
〃　〃	〃	〃　「至上善」	
〃　四月	「帝国文学」	ギクトル・ユウゴオ　「良心」	
〃　〃	「万年艸」	カアル・ブッセ　「山のあなた」	
〃　〃	〃	オイゲン・クロアサン　「秋」	
〃　〃	〃	ヘルベルタ・フォン・ポシンゲル　「わかれ」	
〃　〃	〃	テオドル・ストルム　「水無月」	
〃　五月	「青年界」	シェクスピヤ　「花くらべ」	
〃　〃	〃	クリスティナ・ロセッティ　「花の教」	「英文学に顕れたる花」中に掲載
〃　一一月	「白百合」	シュリ・プリュドン　「夢」	〃
明治三七年　一月	「こゝろの華」	ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ　「春の貢」	
〃　〃	「明星」	エミイル・ゑルハアレン　「鷺の歌」	副題「象徴詩」
〃　二月	「英文学叢誌」	ブラウニング　「岩陰に」	初出題「秋の教」
〃　一〇月	「中央公論」	ダンテ・アリギエリ　「心も空に」	「ダンテ「新生」章第一」中に掲載　初出題「第一ソネットオ」
明治三八年　一月	「明星」	ダンヌンチオ　「燕の歌」	
〃　〃	〃	ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ　「出征」	

〃	二月	「白百合」	シェクスピヤ「花くらべ」
〃	〃	〃	クリスティナ・ロセッティ「花の教」
〃	〃	「精華」	ダンテ・アリギエリ「心も空に」
〃	六月	「明星」	エミイル・ゼルハアレン「法の夕」
〃	〃	〃	ゼルレイヌ「落葉」
〃	〃	〃	エミイル・ゼルハアレン「水かひば」
〃	〃	〃	アンリ・ドゥ・レニエ「花冠」
〃	〃	〃	ジォルジュ・ロオデンバッハ「黄昏」
〃	〃	〃	アンリ・ドゥ・レニエ「銘文」
〃	〃	〃	〃「愛の教」
明治三八年	七月	「明星」	ルコント・ドゥ・リイル「大饑餓」
〃	〃	〃	ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ「床」
〃	〃	〃	ボドレエル「信天翁」
〃	〃	〃	ゼルレイヌ「よくみるゆめ」
〃	〃	〃	ボドレエル「人と海」
〃	〃	「音楽」	ハイネ「花のをとめ」
〃	八月	「明星」	ルコント・ドゥ・リイル「真昼」
〃	〃	〃	ダンヌンチオ「篠懸」
〃	〃	〃	〃「声曲」
〃	〃	〃	キルヘルム・アレント「わすれなぐさ」

明治三六年五月「英文学に顕れたる花」から翻訳詩のみ転載	
〃	
「新生(ダンテ)」中に掲載 初出題「ソ子トオ第一」明治三七年一〇月「ダンテ「新生」章第一を改稿転載	
総題「象徴詩」	
〃	
〃	
〃	
〃	
総題「海潮音」	
〃	
〃	初出題「よく見る夢」
〃	
初出題「花の少女」	
総題「光明道」	
〃	
総題	〃 初出題「ショパンの即興楽をきゝて」明治三四年一二月「楽声」から翻訳詩の

発表時期	発表誌	翻訳詩	備考
明治三八年八月	「明星」	アルベエル・サマン「伴奏」	み改稿転載(「音楽新報」と同時掲載)
〃	「音楽新報」	ダンヌンチオ「声曲」	総題「光明道」
〃	〃	ギルヘルム・アレント「わすれなぐさ」	初出題「ショパンの即興楽を聴くてそのこころをよめる」明治三四年一二月「楽声」から翻訳
〃	〃	ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ「珊瑚礁」	詩のみ改稿転載(「明星」と同時掲載)
九月	「明星」	ボドレエル「破鐘」	初出題「わすれな草」
〃	〃	マラルメ「嗟嘆」	総題「白琺瑯」
〃	〃	エミイル・ゼルハアレン「火宅」	〃
〃	〃	〃「畏怖」	〃
〃	〃	ジアン・モレアス「賦」	〃
〃	〃	オオバネル「白楊」	〃
〃	〃	〃「海のあなたの」	〃
〃	〃	〃「故国」	〃
〃	一〇月	「明星」	
初出未詳	(不明)	エミイル・ゼルハアレン「時鐘」	
〃	〃	ルコント・ドゥ・リイル「象」	
〃	〃	ボドレエル「薄暮の曲」	
〃	〃	〃「梟」	
〃	〃	ゼルレエヌ「譬喩」	
〃	〃	パウル・バルシュ「春」	
〃	〃	ブラウニング「瞻望」	

〃	ギエレ・グリフィン「延びあくびせよ」
〃	アルトゥロ・グラアフ「解悟」
〃	ダンヌンチオ「海光」

をすることができない状況にあったのである。

こうした上田敏の状況に着目して、今まで以上の親密な関係をむすび、「明星」という恰好の檜舞台を貸し与えて、定期的に集中的に翻訳詩を発表する企画をし、それをまとめて詩集に上梓することを慫慂したのが、「明星」主幹の与謝野鉄幹であったと推定される。

上田敏が与謝野鉄幹と親しくなった契機は、「明星」に執筆を依頼されたことに始まり、その時期は「明星」における上田敏の著作の初見が、明治三三年一〇月のピエール・ロチ（Pière Loti）原作の翻訳「屠牛の声」（後に「屠牛」と改題）であることから、ほぼその頃とみてよい。上田敏の与謝野鉄幹への好誼は、所謂『文壇照魔鏡』事件で与謝野鉄幹が社会的に弾劾され苦境に陥ったときも少しも損なわれることなく、ついに上田敏が与謝野鉄幹・晶子夫妻の長男・光の名づけ親になるまで親密なものとなる。そして今度は与謝野鉄幹が「明星」の誌面を提供することで、思うように文学活動の出来ない上田敏を支援したのである。このことは上田敏にとり一定の期間ではあるが自分の自由に腕を振るうことのできる発表の場を獲得したことを意味し、「明星」にとっては満州にいる森鷗外を除けば匹敵する者のない学匠の翻訳者を抱え込んだことを意味する。

こうして『海潮音』の成立した背景が明らかになるにしたがい、企画者としての与謝野鉄幹の存在が注目されてくるのであるが、この問題については今後なお検討してゆきたい。

さて、つぎに『海潮音』の翻訳詩を発表時期からみると、表Dにおいて点線で区切るように三つに分類できる。

第一の時期にあたる明治三四年一二月から三八年二月までに発表された翻訳詩は、当初、主に「万年艸」に一と月おきに発表されていたが中断され、半年後「明星」や「白百合」等の文芸雑誌に散発的に発表される。これは客分としては雑誌に執筆できても、所詮、自己の主催する機関誌を持つことの叶わなかった上田敏の立場を示すものとみてよい。

第二の時期にあたる明治三八年六月以降に発表された翻訳詩は、「明星」誌上にそれぞれ総題を付し、毎月集中的に発表されている。『海潮音』はもともと書名を『詩集』として蒲原有明の詩集『春鳥集』の巻末に出版広告されるが、同年七月「明星」に発表された詩編の総題「海潮音」が詩集の書名として採用され、その上この時期に発表された翻訳詩は『海潮音』の中心を形成する詩編であることから、この時期の詩編はあらかじめ詩集にまとめることを意識し計画的に発表されたものと考えられる。

第三の初出未詳の翻訳詩は、『海潮音』の編纂時期に、急遽、付加されたものではないか、と推定される。根拠については『海潮音』の原典およびその影響関係の問題と関わるので後述する。

Ⅳ 『海潮音』の原典

手順(三)とした上田敏が翻訳するに際し依拠した原典を検討する。(次頁、表E参照。尚、表Eは島田謹二氏・安田保雄氏の研究成果注*をもとに、筆者が京都大学所蔵の上田敏旧蔵本および日本近代文学館所蔵の上田敏旧蔵本目録 MS. *Catalogue of books in the Library of Ueda Bin* を調査し作成したものである。)

表Eで明らかになることは、ほとんどの翻訳詩が『海潮音』に記される出典に直接基づくものでなく、当時流布して

表E 『海潮音』の翻訳詩の原典

翻 訳 詩	上田敏の依拠した原典
ダンヌンチオ	
燕の歌	Arthur Symons の英訳本 *FRANCESCA DA RIMINI*, Heinemann, London, 1902.
声曲	D'Anunnzio; *TRIONFO DELLA MORTE*, Fratelli Treves, Milano, n.d. (上田敏旧蔵本、署名および1902年の日付あり。現在所在不明)、又は、G. Hérelle の仏訳本 *TRIOMPHE DE LA MORT*, Lévy Frères, 1896.
ルコント・ドゥ・リイル	
真昼	H. E. Berthon 編; *SPECIMENS OF MODERN FRENCH VERSE*, Macmillan, London, 1899.
大饑餓	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
象	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ	
珊瑚礁	J. M. Hérédia; *LES TROPHÉES*, Alphonse Lemerre, Paris, n.d. (上田敏旧蔵本)及び、H. E. Berthon 編; *op. cit.*
床	J. M. Hérédia; *op. cit.* 及び、H. E. Berthon 編; *op. cit.*
出征	J. M. Hérédia; *op. cit.*
シュリ・プリュドン	
夢	Sully-Prudhomme; *LES ÉPREUVES*, Alphonse Lemerre, Paris, n.d. (上田敏旧蔵本)
ボドレエル	
信天翁	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
薄暮の曲	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
破鐘	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
人と海	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
梟	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
ヱルレエヌ	
譬喩	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
よくみるゆめ	P. Verlaine; *POÈMES SATURNIENS*, Léon Vanier, Paris, 1903. (上田敏旧蔵本)及び、H. E. Berthon 編; *op. cit.*

翻　訳　詩	上田敏の依拠した原典
落葉	P. Verlaine; *op. cit.* 及び、H. E. Berthon 編; *op. cit.*
ヰクトル・ユウゴオ	
良心	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
フランソア・コペエ	
礼拝	H. E. Berthon 編; *op. cit.*
ヰルヘルム・アレント	
わすれなぐさ	L. Jacobowski 編; *NEUE LIEDER DER BESTEN NEUEREN DICHTER FÜR'S VOLK*, Liemann, Berlin, 1899.
カアル・ブッセ	
山のあなた	L. Jacobowski 編; *op. cit.*
パウル・バルシュ	
春	L. Jacobowski 編; *op. cit.*
オイゲン・クロアサン	
秋	L. Jacobowski 編; *op. cit.*
ヘルベルタ・フォン・ポシンゲル	
わかれ	L. Jacobowski 編; *op. cit.*
テオドル・ストルム	
水無月	L. Jacobowski 編; *op. cit.*
ハインリッヒ・ハイネ	
花のをとめ	A. Rubinstein の楽譜に付されたドイツ語原詩、及び、その英訳詩であるが、英訳詩については未詳。
ブラウニング	
瞻望	R. Browning; *ROBERT BROWNING'S SELECTED POEMS*, n.p. n.d. 〔1〕(上田敏旧蔵本、署名および April, 1898 の日付あり。現住所在不明)、又は、同; *POEMS OF ROBERT BROWNING*, Crowell, New York, n.d. 〔2〕(上田敏旧蔵本、現在所在不明)。
出現	R. Browning; *op. cit.* 〔1〕, 〔2〕.
岩陰に	R. Browning; *op. cit.* 〔1〕, 〔2〕.
春の朝	R. Browning; *op. cit.* 〔1〕, 〔2〕.
至上善	R. Browning; *op. cit.* 〔1〕, 〔2〕.
ヰリアム・シェイクスピヤ	
花くらべ	未詳。

翻　訳　詩	上田敏の依拠した原典
クリスティナ・ロセッティ	
花の教	未詳。
ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ	
小曲	D. G. Rossetti; *THE HOUSE OF LIFE*, Thomas B. Mosher, Portland, 1898. (上田敏旧蔵本)
恋の玉座	D. G. Rossetti; *op. cit.*
春の貢	D. G. Rossetti; *op. cit.*
ダンテ・アリギエリ	
心も空に	D. G. Rossetti の英訳本 *EARLY ITALIAN POETS*, George Newnes & Charles Scribner's Sons, London & New York, 1904. (上田敏旧蔵本、署名および March, 1905 の日付あり。)を参照したか。
エミイル・ゼルハアレン	
鷲の歌	E. Vigié-Lecocq; *LA POÉSIE, CONTEMPORAINE, 1884-1896*, Mercure de France, Paris, 1896.
法の夕	AD. van Bever & Paul Léautaud 編; *POÈTES D'AUJOURD'HUI 1880-1900, Morceaux Choisis*, Mercure de France, Paris, 1900. 4ème éd. (上田敏旧蔵本、署名および Aug. 1904 の日付あり。)
水かひば	AD. van Bever & Paul Léautaud 編; *op. cit.*
畏怖	AD. van Bever & Paul Léautaud 編; *op. cit.*
火宅	Edmund Gosse; *FRENCH PROFILES*, Heinemann, London, 1904.
時鐘	AD. van Bever & Paul Léautaud 編; *op. cit.* 及び、E. Vigié-Lecocq; *op. cit.*
ジョルジュ・ロオデンバッハ	
黄昏	AD. van Bever & Paul Léautaud 編; *op. cit.*
アンリ・ドゥ・レニエ	
銘文	AD. van Bever & Paul Léautaud 編; *op. cit.*
愛の教	AD. van Bever & Paul Léautaud 編;

翻　訳　詩	上田敏の依拠した原典
	op. cit.
花冠	AD. van Bever & Paul Léautaud 編; *op. cit.*
フランシス・ギエレ・グリフィン	
延びあくびせよ	AD. van Bever & Paul Léautaud 編; *op. cit.*
アルベエル・サマン	
伴奏	未詳。
ジャン・モレアス	
賦	AD. van Bever & Paul Léautaud 編; *op. cit.*
マラルメ	
嗟嘆	S. Mallarmé; *VERS ET PROSE*, Perrin, Paris, 1901. (上田敏旧蔵本)
オオバネル	
白楊	William Sharp; "THE MODERN TROUBADOURS," *Quartery Review*, No. 194, Oct. 1901. 〔1〕
故国	William Sharp; *op. cit.* 〔1〕
海のあなたの	William Sharp; *op. cit.* 〔1〕
アルトゥロ・グラアフ	
解悟	William Sharp; "ITALIAN POETS OF TODAY," *Quartery Review*, No. 196, Jul. 1902. 〔2〕
ダンヌンチオ	
篠懸	William Sharp; *op. cit.* 〔2〕
海光	未詳。

いた詞華集や評論から訳出されている事実である。たとえば『海潮音』ではボードレールの翻訳詩の出典は『悪の華』と記されるが実際はH・E・バーソンの詞華集であり、オーバネルの翻訳詩の出典は『詩集』と記されるが実際はウィリアム・シャープの評論である。

そして上田敏が翻訳するに際し依拠した原典の特徴として、当時における象徴主義をはじめとする新しい文学を紹介し解説する詞華集や評論であることは注目されてよい。

主要な原典を二例挙げれば、翻訳詩一五編の原典となったH・E・バーソンの詞華集は、オックスフォード大学教授の編者が英語を母国語とする学生を対象に近代フランス詩を教授する目的で編集したものであり、序章で「フランス詩の構造」を解説したあと、第一部「抒情詩の再流行」としてロマン主義運動を、第二部「同時代の詩人たち」として高踏派と象徴主義を掲げて分類し、代表的な詩人ごとに原詩を挙げ、巻末に後注をつけて各詩人の略歴を記し、原詩のわかりにくい箇所に簡単な説明を付したものである。

また、翻訳詩一〇編の原典となったアド・ヴァン・ブヴェル&ポール・レオトーの詞華集は、当時における新思潮であった象徴主義の代表的な詩人たちの文学を序文に記すように「教育的に」紹介したものである。各詩人はアルファベット順に配列され、詩人の略歴、同時代の評価、文献目録が手際よく記される。上田敏旧蔵本における書き込みの多くは文献目録に関するもので、『海潮音』の翻訳詩に関する書き込みは特に認められない。

したがって、新しい文学を紹介する目的を持ったこれらの原典を底本として、それに倣うかたちで『海潮音』の序文に記すように翻訳者の嗜好と異なり象徴詩の紹介につとめ所々に解説文を付していることから、『海潮音』はこうした原典に共通してみられる啓蒙的な性格の認められる翻訳詩集であったと考えられる。

V　原典と翻訳詩の配列

手順(四)として、原典が『海潮音』の翻訳詩の配列にどのような影響を与えたかを検討する

『海潮音』の翻訳詩の配列については、以下の三つの法則が認められる。

第一の法則は、『海潮音』の翻訳詩が主要な原典ごとに大別され配列されていることである。

表Eから『海潮音』はH・E・バーソンの詞華集、L・ヤコボウスキーの詞華集、アド・ヴァン・ブヴェル&ポール・レオトーの詞華集を柱として構成されることがわかる。そして特に『海潮音』の刊行が計画される明治三八年六月以降に発表された翻訳詩の主要な原典であるH・E・バーソンの詞華集とアド・ヴァン・ブヴェル&ポール・レオトーの詞華集を『海潮音』の前半部、後半部のそれぞれの中心に据えていることが注目される。内容としては、H・E・バーソンの詞華集がフランス語圏の高踏派から象徴主義にかけて当時よりやや以前の時代の詩人に対応し、アド・ヴァン・ブヴェル&ポール・レオトーの詞華集がそれ以後の当時における現代の象徴主義詩人に対応している。この二つの中心を包み込むようにして、巻頭と巻末にダヌンチオの詩がある。これは、上田敏のダヌンチオへの傾倒をうかがわせるものである。上田敏のダヌンチオに関する知識は、明治二五年(一八九二)のフランスの雑誌「両世界評論」*REVUE DES DUEX MONDES* に掲載されたE・M・ヴォギュエの評論「羅甸文芸復興」(E. M. Voguë; "LA RENAISSANCE LATINE")に基づくものであることから、ダヌンチオをヨオロッパ文芸の新思潮の導き手として理解していたことを推定させる。

第二の法則は、こうして原典別に配列された後、同じ原典の各詩人は主に今まで挙げた原典の評論や解説に基づく上

田敏の西洋文学の知識により配列し直されていることである。（但し、これにはL・ヤコボウスキーの詞華集等の場合のように幾つかの例外が認められる。）

たとえばH・E・バーソンの詞華集の場合、表Eから明らかなようにほぼ高踏派から象徴主義にかけての文学史の流れを踏まえて配列される。ユーゴーやコペーが後に配列されることは例外である。理由として、この二編の翻訳詩は同じ原典から訳出される明治三八年六月以降に発表された翻訳詩と比較して、発表時期が明治三五年五月・明治三六年四月と隔り長編の叙事詩という点で性格を異にし、しかもH・E・バーソンの詞華集からL・ヤコボウスキーの詞華集へ移行するに際しつぎにくる短編の抒情詩との対照を明確にするためと推定される。

アド・ヴァン・ブヴェル&ポール・レオトーの詞華集の場合は、まずベルギーの象徴主義詩人とフランスの象徴主義詩人とに大きく分類され、その代表的な詩人としてエミール・ヴェルハーレンがベルギーの象徴主義詩人のはじめに、同様にアンリ・ド・レニエが、フランスの象徴主義詩人のはじめに配列される。そして更にマラルメがジャン・モレアスの後に付け加えられることにより、当時における現代の象徴主義詩人全体として最初と最後に代表的存在としてエミール・ヴェルハーレンとマラルメが来るように構成されているのである。

第三の法則は、各詩人における翻訳詩の配列は同じ原典に拠る場合に原則として原典の詩の配列（原典が二つの場合は、そのいずれかの配列）に従っていることである。尚、L・ヤコボウスキーの詞華集やウィリアム・シャープの評論の場合も例外として、この法則が適用される。（次頁、表F参照）

表Fに記される番号は翻訳詩の原典における配列順序を示すものである。たとえば表Fの最初にあるルコント・ド・リールを例にとると、原典のH・E・バーソンの詞華集にリールの詩は四編あり、つぎの順序で配列される。Midi, Le

表F　原典における翻訳詩の配列順序（原則として同じ原典・同じ詩人の場合にかぎる）

原作者	翻訳詩	H. E. Berthon の詞華集		備考
ルコント・ドゥ・リイル	真昼	1		総題「光明道」の冒頭詩
	大饑餓	3		総題「海潮音」の冒頭詩
	象	2		初出未詳詩
			LES TROPHÉES	
ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ	珊瑚礁	1	2	総題「白琺瑯」の冒頭詩
	床	2	3	
	出征		1	
ボドレエル	信天翁	1		
	薄暮の曲	2		初出未詳詩
	破鐘	3		
	人と海	4		
	梟	5		初出未詳詩
			POÈMES SATUR-NIENS	
ゴルレエヌ	譬喩	3		初出未詳詩
	よくみるゆめ	2	1	
	落葉	1	2	
		L. Jacobowski の詞華集		
キルヘルム・アレント	わすれなぐさ	1		
カアル・ブッセ	山のあなた	3		
パウル・バルシュ	春	2		初出未詳詩
オイゲン・クロアサン	秋	4		
ヘルベルタ・フォン・ポシンゲル	わかれ	5		

原作者	翻訳詩	H. E. Berthon の詞華集		備考
テオドル・ストルム	水無月	6		
ブラウニング	瞻望	未詳		初出未詳詩
	出現	〃		
	岩陰に	〃		
	春の朝	〃		
	至上善	〃		
		THE HOUSE OF LIFE		
ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ	小曲	1		
	恋の玉座	2		
	春の貢	3		
		AD. van Bever & P. Léautaud の詞華集		
エミイル・ゼルハアレン	鷺の歌			
	法の夕	2		総題「象徴詩」の冒頭詩
	水かひば	1		
	畏怖	4		
	火宅			
	時鐘	3		明治38年10月に急遽発表
アンリ・ドゥ・レニエ	銘文	1		
	愛の教	2		
	花冠	3		
		THE MODERN TROUBA-DOURS		
オオバネル	白楊	2		オオバネル連作の最初の詩編
	故国	1		
	海のあなたの	3		

原作者	翻訳詩	ITALIAN POETS OF TODAY		備考
アルトゥロ・グラアフ	解悟	1		初出未詳詩
ダンヌンチオ	篠懸	2		

Cœur de Hialmar, Les Éléphants, Sacra Fames の順序である。ここで『海潮音』に翻訳されていない詩 Le Cœur de Hialmar を除外すれば「真昼」Midi が一番最初にあるので1、「象」Les Éléphants は二番目にあるので2、「大饑餓」Sacra Fames は最後の三番目にあるので3となる。尚、ホセ・マリヤ・デ・エレディヤの場合のように原典が二つ考えられる場合は二つとも挙げておくことにする。

表Fから明かなように大体において各翻訳詩は番号順に配列されていることが認められる。そしてこの法則に適わない配列になっていれば、その翻訳詩が雑誌発表時に全体の冒頭の詩として配列された重要な詩編か、または初出未詳の詩編である場合がほとんどである。このことは『海潮音』全体の翻訳詩の配列を考慮し、その必要性のために第三法則と異なり例外的な配列となったと考えられる。

たとえば表FのL・ヤコボウスキーの詞華集で、もし各詩編が第三法則どおり配列されれば123456と順番どおりになる筈である。だが、実際は2と3が入れ替わっている。そこで2に当たるパウル・バルシュの「春」に注目すると初出未詳詩であり、しかも原題の「五月」(Mai)とあるのを訳出するときに「春」とわざわざ訳し変えている。これは類似した構成を持つつぎの詩編オイゲン・クロアッサンの「秋」と対照させる編纂意図により第三法則と異なる配列にしたと推定される。

エミール・ヴェルハーレンの場合はアド・ヴァン・ブヴェル&ポール・レオトーの詞華集を原

典としない「鷺の歌」と「火宅」を例外として除けば1234と順番どおりになる筈である。だが、実際は2143となっている。これは当初、明治三八年一〇月に急遽発表された3に当たる「時鐘」は翻訳する予定がなく、代表作としてヴィジエ・ルコックの評論およびエドムンド・ゴッスの評論に掲げられた「鷺の歌」と「火宅」をそれぞれはじめとおわりに配列し、そのなかにアド・ヴァン・ブヴェル&ポール・レオトーの詞華集の詩三編を入れる予定であったと考えられる。そうするとなかの詩三編が214となる。2に当たる「法の夕」が第三法則に異なって先に来ているのは総題「象徴詩」の冒頭詩として重要視されたためと推定される。そしてこれに「時鐘」が付け加えられた結果、いまみるように2143という配列になったと考えられるのである。(尚、「鷺の歌」と「時鐘」はヴィジエ・ルコックの評論『現代詩』をも原典としているが、それぞれの詩編が掲載されている箇所は内容を異にする別個の章においてであることから、第三法則は適用されないものとする。)

ところで第三法則で注目されることは、その法則の例外として初出未詳詩の関わることである。この例外的な配列は『海潮音』全体の翻訳詩の配列を考慮した結果と考えられる。これは手順(二)で述べた初出未詳詩が編纂時に加えられたものとする推定に関係する。

初出未詳詩が編纂時に加えられたとする根拠として、つぎのことが挙げられる。(イ)初出未詳詩は第三法則に異なってまでも、各詩人の詩編のはじめやおわり、または次の詩編と対照させるような重要な位置に配列されることから詩集の編纂を考慮したものと考えられること。(ロ)初出未詳詩の原典は『海潮音』の刊行が予定されたと推定される明治三八年六月以降の発表詩と同じ原典であり、内容からみてもほぼ同じ時期に訳された可能性が考えられること。(ハ)『海潮音』の出版予定日が、「明星」に発表された広告によると、当初九月一日であったのが一〇月一日に変更され、さら

に同月一三日に至るというように詩集の刊行の時期が延期され、しかも同じ初版本でありながら国立国会図書館所蔵本のように他と異なり奥付の日付に不備が認められるものも存在することから、発表した詩編だけで短期間に詩集を構成するには編纂が手間取ってしまったと考えられること、の三点が考えられる。

したがって、このようにしてみてくると、『海潮音』は、三つの法則により周到な配慮のもとに配列された翻訳詩集であると推定されるのである。

Ⅵ むすび

本稿で述べたことをまとめる。『海潮音』は「芸文」の廃刊に絡み文友館と提携できなくなった上田敏が、与謝野鉄幹の企画により短期間に集中的に「明星」の誌面を提供されたことで成立した翻訳詩集であり、上田敏に馴染みのない本郷書院から刊行されるに至ったこともこの「明星」との関係によると推定される。そして『海潮音』刊行の計画が具体化したのは明治三八年六月以降のことであり、同年一〇月までの短期間に編纂されたため発表詩だけで詩集を構成することが困難となり、初出未詳詩を編纂時に付加したのではないか、と考えられる。上田敏が翻訳に際し依拠した原典は当時の最新の文学を紹介した啓蒙的な詞華集や評論であり、『海潮音』の翻訳詩の配列もほぼそれに準拠するかたちで、上田敏の受容した文学の知識や『海潮音』全体の構成を考慮しながら、先述の三法則によりなされていると推定される。

最後に、本稿は基礎的文献の資料紹介にとどまった。したがって上田敏における象徴主義理解の実相、明治三八年の時点における海外文学紹介にみる啓蒙性、「明星」との繋がりにみる文学史的意義等の問題については今後の課題とし

たい。

注＊　島田謹二氏「上田柳村の『海潮音』」（『日本における外国文学』上巻所収、昭和五〇年一二月、朝日新聞社）、安田保雄氏「『海潮音』の原典」（『上田敏研究――その生涯と業績――』（増補新版）所収、昭和四四年一〇月、有精堂）等。

［付記］　本稿は昭和六二年六月の本塾芸文学会における口頭発表をもとに改訂作成したものである。尚、本文中における引用文は新字体に改めている。
本稿作成にあたり檜谷昭彦先生のご教示を得、資料について島田謹二先生・安田保雄先生・森亮先生のご助言を得た。資料は京都大学・国立国会図書館・日本近代文学館に便宜を図って頂いた。ご厚意に感謝します。